

令和 4 年 8 月 25 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00366

研究課題名（和文）二十世紀中国画家の継承と創造に関する言説の文学的考察

研究課題名（英文）A literary study on 20th century Chinese major painter's remarks of traditional heritage and originality

研究代表者

西上 勝（Nishigami, Masaru）

山形大学・人文社会科学部・名誉教授

研究者番号：10189277

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国二十世紀前半期における美術概念の受容と普及の推移を踏まえ、同時期に活動した主要な中国人画家たちの作画に関する論評を、伝統の継承と創造の観点から文学的に明らかにした。その内容は主として2021年に発表した論文「屈曲する美術 1929年第一回全国美術展覧会前後の美術評論について」にまとめた。この論文で示した論点に基づき、二十世紀前半期中国の水墨画家と油彩画家が呈示した継承と創作に関する言説を、正当に評価できるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

美術という語が日本国内で創出された後、二十世紀前半期に中国で普及していった推移を、初めて明らかにできた。また、社会に普及していく美術概念を、同時代の中国人画家がいかに受け止めたかを、彼らの論説を通じて具体的に解明した。二十世紀前半期中国の水墨画家や油彩画家は、現代日本では必ずしも馴染みがないが、彼らの知的営みの一端を、現代日本社会に分かりやすく紹介することができるようになったところにも、本研究の意義がある。

研究成果の概要（英文）：In my literary study, evaluate the first half of 20th century major Chinese painter's remarks of traditional heritage and originality, considered the changing concept of art at this period. This evaluation made public in my paper "Twisted Art :On art criticism durling the first national fine art exhibition 1929 before and after". From the point in this paper, we could appreciate Chinese painter's remarks at this period.

研究分野：中国文学

キーワード：二十世紀中国絵画 中国画 美術評論

1．研究開始当初の背景

令和元年度の研究開始当初にあっては、次の二項目がその背景としてあった。

（１）二十世紀前半期中国における主要画家の生活とその批評言説のおおよその状況を理解する。

（２）二十世紀中国絵画史の大まかな流れを把握する。

（１）については、この時代の代表的中国画家である齊白石（1864-1957）と黄賓虹（1865-1955）、この二人の間にある伝統水墨画法をめぐる見方の微妙な差異について着目して考察を深めていた。また、中国画批判の先鋒にあった、西洋古典主義的写実主義を標榜した洋画家の徐悲鴻（1895-1953）の中国画批判の要点を整理していた。

（２）については、Michael Sullivan 氏の先駆的業績である“ Art and artists of Twentieth century China ”（1996）を肇とし、李錡晋・万青力両氏合著『中国現代絵画史』（2011）が既にあり、これを利用して近現代中国絵画史の流れの大筋をとらえた。加えて、今世紀以降、中国国内でも過去の見直しが進むことで、呂澎『20世紀中国芸術史』（2012）のような文化史的知見を加えた芸術史が現れた。これらの美術史領域の論著の助けを得て、二十世紀中国絵画史の大まかな流れを把握していた。

2．研究の目的

本研究の目的は、二十世紀中国の個別の画家や流派の絵画表現に関して、歴史的に概観することではない。本研究の目的とするところは、中国画家の創作をめぐる言説群、それはすなわち、論説ばかりでなく、画家の手になる書簡や題画の跋文や詩に及ぶ種々の言語表現において、伝統の継承と新機軸の創出がいかに目指されたのかを探求することであった。とりわけ、伝統的文人画と向き合わざるを得なかった二十世紀前半期中国の画家たちは、さらに他方で移入される西洋画技法へも対応しなければならなかった。そのほかにも、政治社会的な変動や、それに伴う絵画受容層の変遷など、画家たちをとりまく時代環境は、複雑さを増していた。伝統的中国画法への執着度と、外界からの刺激に対応する度合いによって、画家たちの立場は変異する。本研究の目的は、二十世紀前半期中国の画家たちの絵画創作をめぐる言説を、文学的観点に立って、総合的かつ対比的に解明することであった。

3．研究の方法

（１）想定した研究の方法

上記の目的を達成すべく、以下のような方法によることにした。

研究期間開始以前の収集資料の再検討

研究期間開始後の新資料収集

研究期間に開催された中国二十世紀絵画を内容とする展示会の実態調査

については、既に収集していた画家の詩文集、書簡、自伝などの作品集および絵画作品選集などを、水天中編『20世紀中国美術紀年』（2012）を参照しつつ、再検討し批判を加えることにした。

については、主に中国・台湾で公開される新編集の画家年譜やかつての美術評論のコピー

集、現代中国美術評論家の文集などの収集を進めることにした。

については、中国語圏における二十世紀中国絵画の展示状況を調査することを通じ、絵画作品をできるだけ多数実見するとともに、現代中国語圏における受容の実態を調査する。

(2) 研究方法の実践状況

については、たとえば、中国でよく知られた画家の作品線である河北教育出版社刊『中国名画家全集』について見るならば、その編集の精粗ががやはり散見されることが分かった。研究期間開始以前に、中国各地の専門美術館で開催されていた個々の画家の回顧展に合わせて編集公刊された図録集も批判的に評価することができるようになった。

については、精力的に収集に努めたが、日本国内で入手可能な新資料、例えば王中秀編『黄賓虹年譜長編』（2021）のような重要資料などの収集に限られてしまった。次項 ともども、研究期間と重なった新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴い、中国・台湾への海外渡航には大きな制約が加わった。このため、研究期間内に中国語圏内における調査、資料収集を行うことができなかった。この点が、本研究の推進にとって、大きな障害となった。

4. 研究成果

様々な美術評論が闘わされる最初の契機となったのは、二十年代末に上海で短期間開催された中国で最初の全国美術展覧会であった。

二十世紀中国における美術に関する言説に関心をもち本研究にとって、この出来事は格好の研究対象であった。そこで、顔娟美氏の論文「官方美術文化空間的比較 1927年台湾美術展覧会與1929年上海全国美術展覧会」（2002、中央研究院歴史語言研究所集刊73-4）を手引きとしつつ、考察を進め、その成果として発表したのが論文「屈曲する美術 1929年中国第一回全国美術展覧会前後の美術評論について」である。

この論文で主張した内容を、簡単にまとめれば以下の通りとなる。

「この論文では、中国二十世紀の初頭から二十年代末の第一回全国美術展覧会開催までの期間に著された、主だった美術評論について考察を加えた。

そもそも、美術という漢語は日本で開発され、その後、中国に移入されたことが知られる。中国古典には、この語は存在しなかった。美学を日本や西洋で学んだ王国維（1877-1927）や蔡元培（1868-1940）らの美術評論によって、中国社会に美術という概念は流布した。とりわけ、蔡元培が提唱した「美育」、すなわち美術教育、その重要性が世に受け入れられて、多くの新しい気風を抱いた画家が育った。徐悲鴻、劉海粟（1896-1994）や林風眠（1900-91）ら、西洋画に憧れた画家たちは、美術教育にも深く携わり、多くの後進を世に送り出した。彼らが中心的メンバーとして参画し、開催にこぎつけた中国で最初の全国的美術展覧会は、二十世紀前半期における美術をめぐるさまざまな言説が集まる場ともなったのである。この美術展の出品の多くは、依然として伝統的中国画ではあったが、出品作品をめぐっては、劉海粟ら西洋画法を宗とする画家ばかりでなく、黄賓虹のように当時すでに中国画家として名を成していた老画家たちからも、独自の論評が寄せられた。つまり、この全国美術展覧会は、当時の美術評論が一堂に競い合う場となったのである。この展覧会開催の実態に着目することを通じて、中国二十世紀前半期における美術評論の動態について、総合的かつ対比的な視点を獲得することができる。」

以上が、この論文の内容要旨である。

ただ、この論文では、二十世紀前半期中国における美術評論のあらましを理解することができたとはいえ、ここでは全く触れることができなかった問題がある。それは、その以降の中国現代美術、中でも絵画評論の展開について触れ得なかったことである。

二十世紀三十年代から七十年代までは、中国においては戦争と政治的激動が引き続いた時代で、全国的美術展覧会は政府主導の下継続開催されたものの、蔡元培が夢見た新しい美術教育を通じた絵画創作は現れなかった。二十世紀80年代以降になって、ようやく各地の美大生によって、特色ある作品群が創出されはじめたことは、高名潞氏の『中国当代藝術史』（2021）がよく説くところである。二十世紀前半期に活躍した齊白石、黄賓虹、徐悲鴻、劉海粟らの業績が、二十世紀晩期の中国で、いかに批判的に継承されたのかは、今回の研究成果からすれば、甚だ関心を覚える問題ではあるが、現時点ではすべては将来の課題とせざるを得ない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 西上 勝	4. 巻 第18号
2. 論文標題 屈曲する美術 1929年中国第一回全国美術展覧会前後の美術評論について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山形大学人文社会科学部研究年報	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西上 勝
2. 発表標題 二十世紀三十年代中国の旧形式をめぐる美術評論について
3. 学会等名 中国詩学研究会（五皓）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

放送大学2021年度面接授業（2567962、於山形学習センター、2021年5月）において研究成果を基に、「現代中国の画家とその生活」と題して、講義を行った。

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------